
Special Force School (特殊部隊学校)

ACE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Special Force School (特殊部隊学校)

【Nコード】

N3768Z

【作者名】

ACE

【あらすじ】

世界中の地図の一部にしか載っていない日本の領海にある島で繰り広げられる学園と戦闘のオリジナル小説。

主人公の東出 将は2年なのに特殊部隊への推薦がくるほどの実力者だ。

そして将の幼馴染の志倉 茉都香とその他の個性的なキャラによる小説です。

第一射

「おはよー」

女子が後ろから飛びかかってきた。

「おっとと、危ないだろ！！」

「将なら大丈夫だつてww」

「お前なあ、まあいいか」

俺は東出 将（ひがしで しょう）

SFSの二年生だ成績はいい方で特殊部隊への入隊試験には合格した。だが特殊部隊にはいるつもりはない。
理由はすぐにわかることになるだろう。

後ろから飛びついてきたのは志倉 茉都香。俺の幼馴染だ。

そしてSFS唯一の女子である。

過去には何人かいたみたいだが現在一年から三年まで合わせても2人しかない。

そしてもう一人の女子は……最強だ。

SFSには一番強い人が生徒会長になるという伝統があるのだ。

そしてその生徒会長がもう一人の女子なのである。

特殊部隊学校は世界に情報が一切公開されておらず家族との面会も原則禁止。家族のには緘口令までしかれるという。学校と言いつつもそれが怪しくなってしまうのだ。

まあみんな捨て子だったり孤児院の子だったりとはいらない場合の方が多いのだが・・・

茉都香も俺も親はいない。

捨てられていたところを自衛隊員に拾われ自衛隊の訓練を押さない頃から受けてきたのである。

だいたいが訳ありの子達なのである。

茉都香とは同じくらしいの時期に別の自衛隊員が拾ってきた子で、かなりの時間一緒にいる。

俺は育ててくれた自衛隊員のみんなのために自衛隊に入るつもりだ。

朝から茉都香と話していると周囲から妬みの視線が向けられていた。中には銃を抜いているやつまでいた。

「森山とめるな！俺にあいつを撃たせろ！」

「高橋、学年かわって早々殺人は御免だぜ。」

先ほど俺を撃とうとしていた方は高橋 真司はとてもバカだ。すぐに銃を抜こうとする。

もう一人は森山 辰雄といいいつも高橋の暴走を抑えているしつかり者だ。普段は俺と茉都香、高橋、森山の四人で話していることが多い。

「チイツ」

高橋は舌打しながら愛銃のS & a m p ; W M K 2 2 M o d 0 を
ショルダーホルスターにしまった。

（いまさらだがさすがS F S って感じだな）

高橋の銃のS & a m p ; W M K 2 2 M o d 0 は別名ハツシュパ
ピーといい世界の数多くの特殊部隊や軍隊で採用されているおもに
暗殺に使われる銃だ。だが精密にできているため精度がよくS F S
で使用している奴も多数いる。

ちなみに森山の銃は四六時中M - 2 0 0 を持ち歩いている生粋のス
ナイパーだ。一応サブ装備としてM 9 2 F のミリタリー^{ベレッタ}モデルを持
っているが使っているところは見たことがない。

「ところでさあ今日の一限目のやつ自身ある？」

森山が気を使って話題を変えてくれた。

一限目のやつとは爆弾の解体実習のことである。S F S はあらゆる
テロに対応するため爆弾解体や飛行機への突入実習などを行ってい
る。

これらの実習は、基本二人一組になり小隊単位で行っている。

ちなみに六人組を中隊といいその中の二人組を分隊と読んでいる。

「十、九、八・・・」

「やべえ尾松がカウントダウンはじめやがったぞー！」

尾松とは生活指導の先生でアメリカ人と日本人のハーフでアメリカ

海軍にアメリカ国籍を持っていないのに血が混ざっているという理由ではいつていてもしかも重要職についていた経歴を持っている鬼教官である。

「急げ急げ！新学年から遅刻はいたいぞ。」

こんな時でも高橋のテンションは高い。

「ゴメン将！！」

茉都香からのいきなりの謝罪に混乱していると踏み台にされて俺は倒れた。茉都香はジャンプのおかげで「五」で校門を抜けた。俺は0・5秒で起き上がり走り出……

ドタッ

「ゴメン志倉さんとの事わすれたわけじゃないんだ。」

せなかった。高橋に足をかけられて盛大に転けた。転んだせいで間に合わなかった。

肩に手が置かれた。

（茉都香かなあ・・・慰めてくれて……）

肩に手を置いていたのは尾松だった。

（……うう、吐き気が。）

「残念だが規則は規則だ。」

尾松がニッコリ笑顔で言ってきた。

その後俺は数枚の資料と原稿用紙十枚分の反省文を書かされた。

第一射（後書き）

どうも初投稿のACEです。

読んでくださった方本当にありがとうございます。

なお作者は学生で今受験を控えているため更新が不定期になったり
前期選抜で落ちると更新が止まることがありますのでその点を踏ま
えてください。

駄文ですがこれからもよろしくお願いします。

第二射

反省文を書き終えた俺は教室に向かって歩いていった。

新学年になりクラスが変わった事により教室がガヤガヤしている。

とおってもニクラスしか無いので約半分は同じメンツなのだから・

・

（なんで遅れてすぐに反省文なんだ！？普通は後日提出とかじゃないのか？）

と考えると自分の教室について

「おはようございます。諸事情により遅れました。」

和やかにドアを開けたら先程の高橋が発砲して来たので三点バーストに桜シグを切り替え初弾装填を高速で行い指切り発射で一発目を高橋の放った弾にあて逸らしつつ、二発目を高橋の脇腹に当てた。

「グハッ」

高橋が悶絶しているうちに席についた。制服にはケブラー繊維（防弾繊維の一種）が使われているため貫通をしていない。痛みは相当だがな。

そこで「朝はごめんね」と茉都香が手おあわせて言ってきたので

「気にするな、お前までなら間に合ったのに・・・悪いのは高橋の奴だ。」

と返しておいた。

「オクレテスイマセン。」（遅れてすいません）

未だに日本語が片言なアインシュタイン三世が入ってきた。

この人はアインシュタインの孫で能力もアインシュタイン並だ。
俺の桜シグはフルオート・セミオート・二点バースト・三点バーストと切り替えができるようになっていて。この改造をしてくれたのはこの先生だ。

本来なら違法改造なのだがこの島に籍を置くのにのみ改造を認められている。（各銃メーカーの代表を脅して認めさせた。）

そのため自由に改造できる。この制度のためにアインシュタイン三世はこの島にいるのだ。

そうこうしているうちに^{ホームルーム}H Rが終わって最後の連絡を伝えようとしている時に>ボタン！<
ドアを勢いよく開ける音がして

「東出！至急作戦室だ！チムメン連れて来い！」

「了解！高橋・森山・茉都香・岡本・山田来てくれ。」

いつもの4人+岡本・山田という6人チームで動くことにした。

岡本は重歩兵でベネリのM4 3inchモデルをぶっ放しても反動なんてないののように連射する巨漢の持ち主だ。

山田は岡本とチームを組んでいるやつで、愛銃はVZ・58という精密型の銃だ。岡本の影から相手に正確な射撃をすることのできる

凄腕の持ち主である。

「何があつたんだろう？」

とみんなで話しながら作戦室に向かう俺たちであった。

第二射（後書き）

どうもACEです。

2射を読んでいただきありがとうございました。

一生懸命頑張りますのでどうぞよろしく願います。

感想・誤字脱字・要望等よろしくおねがいます。

第三射

「現在訪問中のオーストラリア財務大臣が誘拐された。」

「『『『『『！？』』』』』」

「質問いいですか？」

森山が許可を求めた。

「なんだ？」

「なぜSATではなくここなんですか？」

「今回の財務大臣による訪問が非公式だからだ。」

「！？わかりました。」

財務大臣が非公式での訪問だったためニュース等になっていなかった。そのため俺が事件を予想出てなかったというわけだ。

「現在犯人たちは広島県霜月高校そりづきに立て籠もり中だ。東出のチームで制圧してくれ。」

「『『『『『了解！！』』』』』」

「全員防弾チョッキ・メット等を夜襲用に変更して第二ヘリポート集合だ。」

「「「「了解」「」「」

ここで説明しておこう。

夜襲用とは迷彩服が黒で防弾チョッキも黒、メットも黒という夜に着ることが多い服装にN V G（ナイト ビジョン ゴーグルの略だ）を装備したものだ。マズルフラッシュ（発射時に発光した光のこと）による失明を防ぐためすべての銃にサイプレッサーを付ける。

そして岡本はM 4ではなくこういう時のためのA K - 7 4を持ってくるように指示した。

「俺は単独で、茉都香と高橋、岡本と山田のペアと森山の狙撃という小隊に分ける。ヘリに乗り込み装備の最終確認だ。終わり次第でるぞ！」

「「「「了解！」

「「「「」

第三射（後書き）

どうもACEです。

第三射を読んでくださった皆様ありがとうございました。
いつも文字数少なくてすいません。
でも学生ということで許してください。

ではSFSをよろしく願いますm（ ）（ ）m

第四射（前書き）

すいません

読む方に夢中でした。

いるかわかりませんが待っててくださった皆様有難うございます。

では第四射どうぞ！！

第四射

「到着まで5分です。」

「わかりました。」

護送担当のヘリの運転手が告げてきた。

「夜襲用パラシュートの確認しとけよ」

今は先生の前ではないので堅苦しい言葉遣いはしていない。

「着きましたが50m近く離れた場所ですので西の方角に飛んでください。森山さんは西南西の方角にあるビルからの狙撃が良いかと思われます。」

ヘリの運転手による説明どうりおりて無線機で突入のタイミングを図ることにしたその瞬間「タン！」高めの独特の音恐らくXD9らしき発砲音が聞こえてきた。

「森山！スコープで状況確認してくれ。」

「財務大臣が何かを言ったため威嚇されたようです。」

「ありがとう。30秒後突入だが今回は静かに制圧だ。全員サイプレッサーつけて待機しろ。」

- - - - -

「GO！」

無線でそう告げるとそれぞれが門番を一撃で仕留めて「静かに」戦闘が始まった。

高橋Side

「GO！」

将の合図により俺が一撃で門番の息の根を止めた。

今までに任務で何人も殺してきたためその辺の感覚が鈍り殺してもあんまり気にならない。

そのまま静かにドアを開けて入って行った。

Side out

岡本Side

「GO！」

「いくもごっ!？」

突入の合図がでてテンションが上がり叫ぼうとしたところで山田に口を塞がれた。

「ナイス山田！」

とお礼を言いつつAKのハイパワーで門番を悶絶させたあと縛って

茂みの方に捨てておいた。

入ったらいきなり見回りがいてビックリしたが山田が正確に首の頸動脈を銃弾で断ち切り悲鳴をあげる暇もなく絶命した。

「岡本は今回はただの殲滅しないんだししっかりしてくれよ！」

「うう・・・わかった」

財務大臣の事を肝に命じていて行動すると思った。

S i d e o u t

第五射（前書き）

本日は話目です。

第五射

森山Side

僕はアインシュタイン先生の魔改造でM・200にサイプレッサーをつけている。

3人が入って行ったところ以外に2箇所入口を確認し門番を狙撃し射殺した。

その後はしばらく財務大臣のいる部屋を観察することにした。

Side out

俺は曲がり角で先を確認するために鏡を使おうと思いポケットから出し壁から出して確認しようとして時「ダダ！」鏡を打ち落とされた。

「チッ！」

静かに舌打しながら少しじょそうをつけてスライディングしながら相手の足に3発当ててこかした。

すると相手が上半身を少し起こして乱射してきた。

そのうちの数発が防弾チョッキやメットの当たった。

衝撃はあるが特注のレベル？の防弾チョッキであるため貫通どころか骨折などもなく直ぐに反撃し相手は被弾し意識を手放した。

俺はマガジンを変えつつ森山に連絡をとった。

「他の2組の状況はどうだ？」

「今は制圧し終わって残りの敵は部屋の4人だけです。今は将の所に向かっところだ」

「ありがとう。大臣の周りにホシはいるか？」

「一人が近くにいます」

「わかった。合図でそいつを頼む」

「了解」

途中で食堂があり覗いてみると中に人がいた。

（森山からは死角か？）

と思いつつも狙いを定めて撃とうとしたところで……

「何をコソコソしてんの？」

「!？」

気づかれていた。

出際にMP-5を黄土色の迷彩服野郎に向けて撃ちつつ部屋の中へ入った。

奴が厨房の方へ入って行ったため机を2、3コたてて簡易的な身を隠すものを作った。

向こうがすぐに乱射を始めたので、できるだけ体を丸めて小さくしてやり過ごした。

「ガチガチ」

マガジンを変えている音がする。

よく見えなかったがドラムマガジンの銃を持っているように見えた。

いましかないと思い飛び出して撃とうとしたらリロードを終えて初弾装填の音が響いた。

まずい！と思ったらMP-5がはじき飛ばされてバラバラになっていた。

銃をこちらに向けていたので腰のあたりで両側に手を開いた。

降参したと見せかけるためである。

ゆっくり歩み寄ってくる。

今だ！とおもい相手から見えない位置にある、ヒップホルスターからSIG P226を抜き右腕と両足に一発ずつ叩き込んだ。

とっさに反応されて数発はなったものの俺には当たらなかった。

- - - - -

「じゃ30秒後にフラッシュたいて突入するぞ！」

全員が立て籠もっている最後の部屋にたどり着いた。

「了解！」

「森山は大臣近くのを頼むぜ！」

「わかってるって！」

全員小声で確認しあったあと突入の時を待った。

「よし！GO！」

俺の合図で突入した。

森山が一人ライフルで倒して、俺が足に2発と横腹に1発で一人倒して、山田と茉都香が一人ずつ倒して財務大臣を救出した。

茉都香が財務大臣を連れて外へ行き犯人を回収しようとした時・・・

「道連れだああ！！！」

犯人グループの一人が手に爆弾のスイッチらしきものを押そうとした。

「調子に乗るな！」

高橋が手首のあたりに銃をうちにそこから先を吹き飛ばした。

「後はうちの別働隊に任せるとするか」

SFSでは急ぎの任務が飛び込んでくることが多数あるため先行隊が強襲し、別働隊が回収するというパターンになることが多い。

そして今回の場合は、包囲もSFSのメンバーに入れ替わっていて報道陣にも一般人が誘拐・拉致されたとしか伝えられていない。

「んじゃ帰りますか。」

こうしているうちに全員が犯人グループを一箇所にまとめて応急処置や拘束を終えたので集合地点へ向かうことにした。

第五射（後書き）

土曜日ということでも話あげさせてもらいました。

これからもよろしく願います

第六射（前書き）

相変わらず駄文ですがよろしく願います。

第六射

「よくやったぞー!!お前らガッハハハ」

学校に帰ると尾松が褒めながら高笑いしていた。

「ありがとうございます」

素直にお礼をいっていると、向こうからハゲ頭の鶴羽花校長つばなはなが走ってきた。

「君たちオーストラリアの総督さんが表彰したらしいからオーストラリアにきて欲しいそうだ」

「わかりました」

「えゝせつかくオーストラリア行くのに2泊かよ!!10泊ぐらいしてこうぜ。どうせ学校が金出してくれるんだしよ」

「そうだそうだ」

高橋がグダグダいって岡本も高橋の意見に賛成している。

「そついう考えは良くないよ!」

2人は茉都香に注意されて静かになった。

「それに今回はお松もついてくるんだぜ？」

俺がそういうと高橋と岡本が座り込んで「もう嫌だ」とか「よりによって尾松かよ！」とかぐちっている。

「おーい！悪い待たせたな」

「『『『『『荷物多い！！』『』『』『』」

全員揃って驚いた。

何しろ尾松は大型トラック使わないと運べないような荷物をリヤカーで運んでいたのだ。

「先生8割おいて行きましようね」

「???まあいいが何故だ??」

そんなに飛行機に乗り切らんわ！と心の中で突っ込む俺と高橋・岡本であった。

「それじゃあ乗り込もうか」

尾松が促してみんなが金属探知機を通ろうとして最初に尾松が通ろうとして――

「ピーーーーーー」

――金属探知機に反応した。

さすが教員！帯銃許可証を見せて別室に行き特有の決まりを説明されることになった。

- - - - -

別室に移動すると防衛省のお偉いさんらしきひとが立っていた。

「どうぞ」と言われて椅子に腰掛けると、防衛省の人は淡々と説明を始めた。

「一応銃は許可しますが、アサルトライフルやマシンピストルなどの連射武器やショットガンのような拡散するようなものライフルのように目立つものはやめてください」

あるいみほとんど禁止されたぞ！とかおもっている

「つまりハンドガンのみってことだな？」

高橋が俺の質問を代弁してくれた。

「まあ実質そういうことになりますね」

皆が「決まりならしょうがない」という気持ちでメインの武器を出していったのだが一人が出している武器で驚いた。

今回、尾松は黒のロングコートできたのだがその内側には10丁を超えるマシンガンやアサルトライフル、ショットガンが入っていたのだ。

そして空港の係員に頼んで鞆をとってきてもらい服の中にあつた銃とハンドガン系に入れ替え始めた。

コルトのM1911（ガバメント）やパイソン、デザートイーグルやM92Fミリタリー（ベレッタ）といった銃に入れ替えていき結局12丁を服の中に入れた。

当然皆は啞然としている。

もちろん数の多さにだがみんな口に出さずに静かに見守った。
みんな無事搭乗することができた。

第七射（前書き）

遅くなつてすいません。

しかも短いです。

最近父が家にいて執筆出来ませんでした。
（言い訳です）
では第七射どうぞ

第七射

オーストラリアまでというのは案外遠いもので8時間かかる。なの
にすることはランプぐらいでとても暇だ。

今は大富豪をしていた。大富豪といっても高橋以外大富豪に1度も
なれていない。

高橋はランプゲームでは最強なのだ。

しかしその大富豪も飽きてしまいやめてしまった。

各自携帯ゲーム機は持ってきてはいるがすでに充電がきれている。

唯一森山だけは電池で充電できる充電器を持ってきていてまだi
padをいじっている。

横目で内容を見るとペガサスというテロ組織の交信用の掲示板だっ
た。

ペガサスは世界有数のテロ組織でNo.3と言われている過激派集
団だ。

宗教の枠を超えてめちゃくちゃしたいやつが集められている。

しかしその掲示板は世界中の警察などが精鋭を投入してもまだ開
けていない所じゃないのか？とおもったが黙っておいた。
ペガサスは活動が最近活発になってきているらしい。

そんなことを考えていると森山が紙に何かを書き出した。

「これを尾松先生まで。」

といって俺に渡してきた。

回せということらしい。

森山のいうとおりに尾松まで回ってお松が読み終わった。

「なんだって!!」

ダダダダダ

尾松が大声で叫んだのとのほぼ同時にマシンピストルを連射する音が聞こえた。

「「「「「「!?!?!?」」」」」」

森山と尾松以外は尾松の声と銃声に驚いた。

第八射（前書き）

今日から冬休み！

でも更新ペースあがりませんか？

受験勉強がありますからね！

では第八射どうぞ

第八射

「? !」

銃声と尾松の声に驚いていると――

「動くんじゃねえ！俺らはpegasusだ！」

ご丁寧に分からバラしてくれました。

「おとなしくしてりやあ悪いようにはしねえ！」

どっちにしろテロなんてしてるんだからビルに突っ込ませたりするんじゃないの? と思ったがこれも口には出さない。

「アニキ！目標のタワーがみえてきましたぜ」

「バカ！タワーに突っ込ませることがわかったらどうするんだ！」

「すいませんアニキ！タワーに突っ込ませるのを匂わせることは二度と言いません！」

[illegible]

SFSのメンバーは自分から暴露してしまったことに対して沈黙してしまった。

「
「
「
きやあ
あああ
「
「
「

飛行機の乗客が騒ぎ始めた。

ダウン！ダウン！

「静かにしろ！この飛行機に乗ったお前らが悪いんだ！」

銃声を聞き乗客はおとなしくなった。

SFSのメンバーは作戦を立てようとしたが尾松が制して

「俺一人で十分だ」

といいのこして敵の数を確認しだした。

尾松 side

敵の数は六人か・・・

ちいと厳しいか？？

まあなんとかなるだろう！

・・・やっぱり将に何人かやってもらった方がいいな。

でも教員として「お前らより上！」って事を見せておきたいから一人で行くか！

俺は脳内会議を終え、黒の防弾性のロングコートの中からLUGERを2丁取り出した。

そして立つと同時に「伏せろお！」とさげび乗客の方を向いていた

3人を速攻でしとめた。

そこでやっと2人が反応してきたが1人2発ずつ腹と心臓とあたりにぶち込んで息の根を止めた。

最後の一人の方に銃を向けて撃とうとしたら犯人が倒れた・・・

俺は何があつたかわからず茫然としていると

「一人でかつこいいところ持つてくんじゃねえよ！」

高橋がそう言つてハツシユパピーを構えていた。

高橋 side

「俺一人で十分だ」だと！？

手柄独り占めしようとしてんじゃねえよ！

と思い銃を構えようとするが狙おうとするやつに限って尾松が倒れてしまう。

もう1人しか残ってないじゃねえか！

と思い構えるとまだ倒されてないようで引き金を引いた。

銃弾は犯人の首に吸い込まれていき犯人は倒れた。

ふと尾松の方をみると茫然としていたので

「一人でかつこいいところ持ってくんじゃねえよ!」

と試みてみた。

s i d e o u t

尾松が奮闘していたのに高橋がラストの一番かつこいいところをもつていつてしまった。

第九射（前書き）

短いです。

よく聞く話でできかけの小説が消えたって話を聞きます。
体験してしまいました。

予想以上にダメージでかかったです。

すいません。言い訳でした。

第九射

結局飛行機を突っ込ませるタワーとはスカイツリーのことだったらしく、まだ日本の近海を飛んでいた。

燃料の補給と乗客へのお詫びの品を渡したのちに再度オーストラリアへ旅立った。

そしてまた8時間飛行機に閉じ込められることとなった。

- - - - -

「尾松先生は寝ないんですか？」

「報告文書だけ仕上げたら休むさ」

「そうですか・・・では先に休みますね」

「おう」

「zzzz」

尾松side

「zzzz」

やっと寝たな。

カバンから無線機（航空機内でも使用可）を取り出し通信を開始した。

「緋村さん東出だけじゃなくてチームをまるごとマークした方がいいんじゃないですかねえ？」

「君が進言するならそうしようじゃないの」

「ありがとうございます。ではまた日本で」

第九射（後書き）

フラグのこして이었습니다。

作者バカなんで思いつきで残しただけなんでどうなるかわかりません。

第十射（前書き）

書き終わってコピーしようと思ったたらカットしてしまいオール消去・

・

気力がなくなり一日空いてしまいました。

すでに何度も空いているんですけどww

第十射どうぞ！

第十射

「ついたぞおー！」

高橋が空港を出てはしゃいでいる。

こいつははしゃいだりすることが多く「子供か!？」と思う行動が多々ある。

今回も飛行機を降りたあたりからずっとテンションが高かったのだが、空港をでて抑えきれなくなったらしい。

「うるさい！ 馬鹿者が！」

と怒鳴って高橋を黙らせた。

高橋が「ううう」と悔しそうなっているがスルーしておこう。

それよりさつき尾松が怒鳴った方がうるさかったぞ。

「フンッ」「ゴチン」

なぜか殴られた。

「何で殴るんですか!？」

「殴らなきゃいけない気がしたからだ！」

尾松は心が読めるのか！すでに人外だな・・・

「フンッ」「ゴチン」

くそお・・・かなりいてえ。

その場でコントをしていると黒光りする高級車が俺たちの前に止まった。

そしてドアがあき、黒のスーツにズボンのポケットからイヤホンマイクのコードをのぞかせているマツチヨなおじさ「ムッ!?」「ゲホゲホ」お兄さんが降りてきた。

ってか心を読める人ってこんなにいいのか!?

「ムッ」

本当で怖い^{マジ}です。

ともいつつも尾松といれ以外すでに乗り込んでいるため俺もいそいで乗り込んだ。

- - - - -

車に乗り込んだあとしばらく世間話や高橋のトランプの強さについて話していたが暇になってきてしまい、みんながバラバラのことをし出した。

今車にはコンセントがついていて充電することができたので大体はゲームをしていたが、将は座って、茉都香は将の膝の上で眠りについていた。

最初は気になったが眠気が勝り寝ていった。

高橋が将に殴りかかろうとしていたのは別の話。

第十一射（前書き）

どうもACEです。

何度も修正してすいませんm（　　）m

これからも誤字脱字・不自然な点・間違っているところを
していだけるとありがたいです。

では第十一射どうぞ

第十一射

「パシン」

乾いた音が響いた。

何の音かって？

俺が高橋にビンタされた音だよ！

いい感じに決まり頬がジンジンする・・・

状況を説明すると、総督さんの家についたから起こさなければなら
ないが、高橋が日頃の感謝を込めてんたしてきてやろうというわけ
だ。

いつもなら喧嘩しているところだが、総督さんの家についたらしい
のでやめておいた。

中にはいると、良くアニメなどで見る右側と左側に階段がありに書
い部分の真ん中当たりでつながっている大きなエントランス？があ
った。

そこからさらに一階部分に三カ所、二階部分に三カ所、それぞれ正
面と左右に扉があり正面は扉を開けると廊下があるつくりになっ
ているようだった。

あまりのスケールにみんなが呆然としてしていると案内人らしき人が一

階左側の扉から出てきて、案内をしてくれた。

その時案内してくれる人が「どうぞ」といつてくれたらしいのだが聞き取れなかった。

オーストラリアでは公用語は英語だがアメリカとは発音が全く違い英語に関する知識が全く訳に立たない。

空港を出た時からチヨコチヨコ尾松が通訳をしてくれたが、今
 思えば戦闘技術があり、語学が得意とかばけも「ムツ」すごいです
 よね。

いちいち人の心を読むなよ！

発言の自由……口に出していないから思想の自由ぐらい俺にもある
 だろ！

「」「」「」「」「」
ないと思う」「」「」「」

全員で否定しなくてもいいじゃないですか。

そんなこんなしているうちに総督さんのいる部屋の前についたらしく案内人の人に尾松がお礼を言っているところだった。

扉が内側に引っ張られながみえるところには黒のスーツで帯銃がバレバレのマツチヨなお兄さん「「ウム」「」がいった。

ってか全員がこころをよめるって……これ以上はご想像にお任せします。

この人数のお兄さんに睨まれると気絶しそうですから。

第十二射（前書き）

いつものことですが短くてすいません m () m

相変わらずの駄文ですが第十二射楽しんでいただければ幸いです。

第十二射

第十二射

尾松によるとすぐに表彰式をはじめたいそうなので、広間へと移動した。

総督さんが長々と話しているが、要約すると「我が国の国民を助けてもらったから、貴方が危険な時は言ってくださいね」ということらしい。

「SFSに危険が迫っても大体のことは余裕で対処するんじゃないかね？」とか考えていた。

忙しいということで表彰状をもらったたらすぐに退場することになった。

廊下を歩いていると小声で尾松がこんなことを伝えてきた。

「みんなにSFSではなくて自衛隊として来ているって伝えるの忘れてた」

「まあ問題なさそうですしいいんじゃないですか？」

「だよな……」

あとあと考えれば「総督さんが話してる時に心を読まれてたら機密がばれてるってことじゃね？」と思ったが、総督さんの話をみんな

が熱心に聞いている時だったから大丈夫だろう。

それにだいたいのことはわかって、全部が正確にわかるわけではない！……と思う。

俺も心を読めるようになりたいなあ……

「「「「「無理だ！」「」「」「」

そうですね……無理ですね……はあ

「ってかお前ら俺がしゃべってないのに返事するんだよ！」

「何となくだよ！」

「おもしろえじゃん！」

「……」

「「「「ガハハハ」「」

整理してみよう……

茉都香と高橋の返事はわかる。高橋の方は少しわからないが……

森山は関心のないことは無視だからおいておこう。残りの三人！
何で笑ってるんだよ！

すごくムカつく……

「「「「「キリッ」「」

さっきのお兄さんたちに負けない迫力で睨んできた。

本当に（マジで）こわいです……

こんなことがありつつも帰りの車の前まで移動し、見送りにきてくれた総督さんに挨拶をしていた尾松が帰ってきたので車に乗り込んだ。

ホテルに迎えたため行きに使った黒の高級車にゆられていると尾松の携帯に電話がかかってきた。

「もしもし……本当ですか！？はい、わかりました。そのように伝えます」

と短い電話だったが、その後尾松が手招きし運転手に聞こえないような声で、

「空港に防衛省のジェット機がきてるらしいからそれに乗せてもらえるそうだ」

「よっしゃあ！VIP席だぜ！」

「ラッキー」

と高橋は喜んで、岡本がそれに乗っていた。

そこで尾松が口を開いた。

「出発が今日の夜だから観光せずにかえるからな」

「「「「「……はあ？」「「「「「」

6人の声が重なった。

6人が疑問に思ってる隙に、尾松が行く先変更を頼んでいたようで車は方向転換し来た道を戻りはじめた。

「「「「「はあ」「「「「「」

再度6人のため息が重なった。

第十三射

結局断れずに防衛省の飛行機に乗ることとなった。

このおかげでめんどろな検査はスルーできた。

今考えると帰りは日本ではないので、防衛省もくそもないからブザ
ー鳴って速攻警察行きだったのだ。

そう考えるとこっちに乗って正解だったのだ。

それに気づいていない高橋はまだ落ち込んでいるが……

高橋の背中を叩きつつ飛行機に乗り込むため歩いて行き飛行機が見
える位置にきた。

「……でっけえ」「」「」

茉都香と高橋、岡本、山田の四人は素直に感嘆の声をあげたが、俺
と尾松は特に驚かず、森山に至っては気にしてすらない。

そんなことがあり飛行機と乗り込むための道を歩いた。

このあと悲劇が待ち構えているとは知らずに……

みんながそれぞれ違うことをして時間を潰していると、メイド服を
きた美女が「食事の準備ができたので食堂まで案内します」と言っ
てきた。

綺麗だなあと思っていると、つま先を踏み抜かれるような激痛がはしった。

「いつてえ！」

思わず叫んでしまうほどだった。

足をみると茉都香のかかどが俺のつま先を踏み抜いていた。

踏み抜かれたようではなくいかれていたのである。

「なにすん……すいません」

なにすんだよ！と言いたかったのだが茉都香の眼力に続けることができなかった。

ちょっと歩いたらすぐにたちどまち「こちらです」と言ってきた。

入ると末席に尾松がいた。

上座には……

「よく来てくれた」

防衛省幹部の方がいた。

第十三射（後書き）

変な終わり方ですいません m (|) m

これからも S F S よろしくお願いします。

第十四射（前書き）

新年あけましておめでとございますm（―）（―）m

本年も作者とSF Sを暖かくみまもってください。

第十四射

結局部屋に入った時点で引き返すという選択肢はとることができないため一緒に食事を摂ることとなってしまった。

「いやあ英雄と食事できるなんて光栄だなあ」

大臣が何か言っているが尾松と俺以外緊張しすぎて話を聞いている余裕がない。

他のメンバーに比べたら茉都香は冷静な方だと思う。
でもガチガチには変わらない。

そんな状況にも関わらず時間は進み尾松と俺以外はほとんど食べることができずに食事が終わりを迎えた。

「いやあ楽しい食事だったよ」

「こちらこそおいしいお食事をありがとうございました」

「いえいえ……東出くんちょっと残ってもらっていいかな？」

「はい……構いませんよ」

防衛省の人が話し出して尾松と話していた。

話を聞きつつ一人で「あんなにガチガチでなにが楽しいだよ」とか

「あいつらは味なんてわかってねえよなあ」と思っていたらいきなり呼び出しをくらった。

しかし断ることもできずにそれに応じることとなった。

まあ断るつもりはないんだが……

みんなが出て行った後給仕をしてくれた人達に退室をしてもらい、やっと落ち着ける状況となった。

実はこの人と俺はすごく親しい。

自衛隊の訓練兵時代から俺のことを認めてくれている人だ。

はじめて会ったのは9歳の時だった。

その時は「息子にそっくりだ」で終わったのだが、翌月また来て、その時は射撃訓練中でその結果を見てかなり気に入ってもらえた。

その後も良くしてもらい、俺を拾ってくれた人である父さんの次に慕っている人だ。

防衛省の方が……川井さんが話を切り出してくれた。

「晚餐は楽しかったかね？」

「はい！でもみんなガチガチでした……」

「覚悟はいいか？」

「はい！もう大丈夫です」

「あと1時間ぐらいだから最後に茉都香ちゃんと話してきた方がいいんじゃないか？」

「いえ……感^ずかれるとダメですから」

「そうか……じゃあ準備^{して}いてくれよ」

「はい」

第十四射（後書き）

PVがやつと1000いきました。

愛されてると思います。が皆さんのおかげです！
本当にありがとうございます

第十五射

俺は部屋でゆっくりしていた。

この飛行機はVIPだから普通かもしれないが、個室があり団だんらん樂室しつまである。

各部屋にファミレスのフリードリンクみたいな機械があったりする。

だから部屋にいればずっと遊んでられるのだ。

コンコン

「はい」

俺が返事をするとなぜかびっくりしたような「キャッ!」と聞こえたあと

「茉都香なんだけど今いいかな?」

「ああ、いいぜ」

俺は動揺を隠すため心を落ち着かせてから返事をした。

もちろん茉都香が夜に部屋にきたからではないぞ?

その後ワンテンポぐらい置いて「ガチャン」とドアを開けて入って

きた。

「聞きたいことがあったからからきたの」

「聞きたいことってなんだ？」

「将って卒業したらどうするの？」

「さあ……でも特殊部隊には入らないつもりだ」

「じゃあ一緒に自衛隊行こうね！」

「……ああ」

俺の言葉を聞いて上機嫌で帰って行った。

嘘は言っていない……言っていないのだが心が痛む……

電話がかかってきた。

画面を見ると川井さんからだった。

「そろそろだ……覚悟はいいか？」

「覚悟はできてます！」

「じゃあ鍵を閉めて出てくれ、回収班が待ってると思うから……」

「はい！わかりました」

これだけの会話で電話を切った。

二日後……

茉都香 side

あの後飛行機がエンジントラブルで墜落した。

みんなと防衛省の人、機長や乗務員などは脱出した。

だが将だけは……脱出できなかった。

遺体すら見つからず今でも搜索活動は続けられている。

「将おおおお……ひぐ……えぐ……」

あの後ずっと泣いている。

だが涙が止まることはない。

好きな人……将が死んだのだ。止まるわけがない。

「将……ひぐ……えぐ……」

第十五射（後書き）

さてさてどうなるのやら（笑）

第十六射（前書き）

間が空いてしまいすみませんでした。

正月だったのと最近FPSにはまったせいです。

後書きでアンケートするんで協力していただけたら嬉しいです。

第十六射

ガチャン

鉄製のドアを開けてカワイさんが入ってきた。

「川井さん！」

「やっと君の配属先と連絡が取れたよ」

「そろそろ部隊名ぐらい教えてくださいよ」

「やーだねー」

何度目かわからないやり取りをした。

あの墜落事故は仕組まれたものだった。

墜落する前に将は飛行機からパラシュートで飛び降りていたのだ。
遺体など見つかるわけがない。

今回のことは川井さんが持ちかけてきてこれをすればより高度な戦闘をすることができると言われたので提案に乗ることにしたのだ。

よくわからないが始末屋（機密を知ってしまった人を消すひと）になつたりするのだと考えている。

もちろん一般人を消すこともあるし自衛官を消すこともある精神的にかなりきつい仕事だ。

精神だけでなく全国を飛び回ることもあるため肉体的にも十分きつ

い。

その上日々の鍛錬もしていかなければならないのだ。

結構大変だと思う……だが俺はもつと戦闘がしたい。それこそ戦地の最前線のような場所へ……

こんなことを言っていると戦闘狂と言われたりするかもしれないが、そう言ったものではない。

「ところで配属先は？」

「とりあえず自衛隊の方へ向かってくれ」

といってドアを閉めてしまった。

すぐ後にダッシュする足音が聞こえてやっときずいた。

「どこの基地か聞いてねえ……」

またしばらくこの場所で川井さんを待つのかと思うとちょっと気が滅入る。

だが待つ他ないし、一応電話一本でだいたいのものは届けてもらえるし、川井さんがこなきゃどうしようも無いので結局待つことにした。

暇だったので夜の街を徘徊していると頭に銃を当てられた。

「よお兄ちゃん俺今ほしいものあるんだけどさあ……金くれないかなあ？」

ちなみにここは裏の路地だ。今は目立つわけにいかないと思いこの道を選んだのだ。

その選択だ幸か不幸かこんなことになってしまったのだ。

しばらく黙っているとヤクザらしき人がまた口を開いた。

「5千円でいいんだって、なあくれないかなあ？」

完全に脅しにかかっている。

「わかりました」

「おお……物分りのいいやつは好きだぜ」

「5千円のパンチあげますよ！」

バツコンとパンチの音がしてヤクザが気絶した。

俺はハンドガンを当てられていると思っていたら実際当てられているのはソードオフのショットガンだったのでちよつと驚いた。

第十六射（後書き）

今回の読んで「何これ？学校終わったじゃん」と思った方もいたんじゃないでしょうか？

そこでアンケートしたいと思います。

- 1、題名を変える
- 2、本文を書き直す
- 3、そのまま

感想等で協力よろしくお願いします。

第十七射（前書き）

アンケート回答ゼロ……

皆さん回答くださいm（ー）m
マジでむなしいです。

ということで感想待ってまーす（笑）

第十七射

その後川井さんが帰ってきたのは実に7日後……一週間も放置しやがって！

ストレス解消がチンピラやヤクザをぶちのめす高校生（の年の人）なんてそうそういないぞ！

というわけで毒づきつつも自衛隊基地ではなく防衛省へ向かっていった。

この前は自衛隊とか言ってたのに……川井さんはわざとなのか適当なのかわからないから正直困る……

しばらく車にゆられてると立派なビルが見えてきた。

門の横に「防衛省」と石に彫ってあった。

俺だけでなく防衛省へきた人は大半が眼にするであろう看板だ。

案内されてビルのエレベーターの前まで来た。

ボタンを押すとすぐに扉が開いた。

今の最新エレベーターはとても速く直ぐに「ピンポーン」と鳴って扉が開いた。

一つ曲がり角を曲がると部屋についた。

ノックして中にはいると木刀を持った川井さんが飛びかかってきた。

「はぁ……またですか」

この言葉からわかるように何度もこのようにして襲いかかってきている。

その度に避けてパンチ寸止めをしているのだ。

今回は……いつも通り振り下ろしてきたのを避けてパンチを放とうとした瞬間……脛に激痛が走った。

めっちゃイテエ……

状況を説明すると……いつも通り振り下ろされた木刀を避けてパンチを繰り出そうとしたら、川井さん（くそじじい）が木刀を腰を使って横に振り回してきたのだ。

それが見事脛にクリーンヒット……

そのまま膝の力が抜けて木刀の勢いで前のめりに転けた……

そして胸と鼻をぶつけた。

胸を打ったことによる呼吸困難と鼻を打ったことによる激痛が同時に襲いのたうちまわった。

「ふっふっふっ……まだ自衛隊時代よりなまっちゃおらんぞ！」

その年なら十分なまってるよ！と言いたいところなのだが……そういうとまだ50じゃ！と帰ってくるのは目に見えているため反論せず放置しておく。

「ところで配属先って何処なんですか？」

「ああ……ちょっとまってくれ」

といい部下に部屋の前からどくように指示した。

「君はフェアリー計画というものを聞いたことがあるかね？」

第十八射（前書き）

この投稿でほぼ学校とは関係なくなりました。

本格的な秘密部隊を書けるように頑張りますのでよろしく願います
m (_ _) m

第十八射

「君はフェアリー計画というものを聞いたことがあるかね？」

今までのふざけていた時の顔とはまったく違う真剣な顔で聞いてきた。

「いいえ……聞いたことはありません」

「まあ聞いたことあるわけねよな」

だったら聞くな！と言いたかったが真剣な顔を崩していない川井さんにそんなこと言えるはずもなく話は進んでいった。

「日本は憲法上軍隊持てないじゃんかよ？」

やっと川井さんの表情が穏やかなものに戻ってくれた。
あの仕事の時の顔の覇気はきついっす……マジで……

その後30分ぐらいフェアリー計画について説明してもらった。

憲法上軍隊を持ってない日本が軍事兵器として開発を進めてきたフェアリー……それは20年かけてやっと開発に成功したものだった。

その開発のために数百人が犠牲になった。
そのフェアリーが研究所を爆破し逃亡したのだ……
研究員は全滅。資料などはすべて焼けてしまった。

俺はそのフェアリーの抹殺をさせられるってことだ。

逃亡したフェアリーは4体いずれも人間離れた身体能力や特殊能力を手に入れている。

例えばジャンプ力が人の10倍あったり走るスピードが1000m5秒で走ったりしてくるらしい。

危なすぎるだろ……

だってジャンプ力が人の10倍ってことは、ちょっと助走をつけて飛べば50m飛んでくるってことだよな？

拳銃の当てることが難しい距離から一気に距離を詰められたら必死確定だ……

しかも再生力が強くて数発撃った程度ではすぐに再生してしまうそうだ。

人間で勝つことは難しいだろう……だが

「やってやろうじゃんよ！」

ガコン！

「態度がでかいわ！」

机に顔面を叩きつけられた。

鼻が折れてるんじゃないの？というくらい痛い……

「何かありましたか!？」

ボタンとドアを開けて部下が部屋に入ってきて眼をパチクリさせている。

どうやらさっきの音に反応したようだった。

「何もないですよ……あはははは」

部下の人は首を傾げていたが退室して行った。

ごまかせていないだろうが何とかやり過ごしたようだ。

こうしての第二の人生が始まったのだ。

第十九射（前書き）

今日から学校だった。

久しぶりに仲のいい友達とあつてボウリングのはなしや釣りの話をできて楽しかったけど校長の話が長くてケツが痛かった。

というわけでただでさえ更新がさらに遅くなるかも！？

第十九射

「ああそついえばスリーマンセルでの行動になるからね」

「……は？スリーマンセルなんて危険す……」

ガコン！

危険すぎると続けたかったのに言わせてもらえなかった。

今度部下の人も「またか」と思ったのか入ってこなかった。

「誰に向かつてその口を聞いてるんだ！」

机に顔面を叩きつけられた。

鼻が折れてるんじゃないの？というぐらい痛い……

今回二回目だぞ……また仕返ししてやるからな！

ベシッ！

「いったあ！」

「うるさい！」「ベシッ！」

「だから！」「ベシッ！」「いたい！」「ベシッ！」「つってんだろおがあ
！」

我慢しきれなくなって上段回し蹴りを放った。

川井さんは手首で受け止めて足をつかんで投げてきた。

あせって受け身をとったが間に合わず背中を強打し、呼吸困難で苦しむこととなった。

俺が苦しんでいるというのに部下を呼んで「こいつをあそこまで連れてってやってくれ」と命令しアイマスクを付け眠りについていていた。

部下が俺をおぶって車に乗せたあと車を走らせた。

行き先はまだ知らない。

しばらく車にゆられていると「もうすぐだぞ」と声をかけられて起きると朝霞駐屯地が見えていた。

朝霞駐屯地は東京都練馬区、埼玉県朝霞市、和光市及び新座市の1都1県にまたがって所在している。

まあ練馬にあるのは門とちよつとしたものだけなのだが……

車が止まりドアを開けてもらったのを確認し車を降りた。

すると5人の自衛官が敬礼で出迎えてくれた。

2人が前で先導し、後ろを3人が道幅ぎりぎりに並びその間を歩い

て奥へと進んで行った。

第十九射（後書き）

そつえば久しぶりの2日連続更新！

まあどうでもいいんですが（笑）

第二十射（前書き）

宣言どうり更新！

活動報告読んでない方はスルーしてください。

第二十射

しばらく歩いていると鉄で囲まれた部屋についた。

中に入っていくと無数の弾痕やナイフで切りつけたあと、なにかが叩きつけられて凹んだあとが多々あった。

そんなことを考えていると自衛隊員の人達が横一列に並んで敬礼しながら挨拶してきた。

「陸上自衛隊！二等陸曹 甘利 祐介！」
あま り ゆうすけ

正直なんか弱っちそうだけど頭がきれいな奴というイメージだ。
服装はいうまでもなく迷彩服だ。

「同じく陸上自衛隊！陸士長 桐沢 敬吾！」
きりさわ けいご

スーツが似合う仕事のできる人ってイメージだな……自衛隊のいるのがもったいないな……うん

「同じく陸上自衛隊！陸士長 木崎 誠一郎！」
きみき せいいちろう

歩いている時からずっと厳格な顔をして威厳を振りまいてた奴だ。
こっちはすぐに銃に手を延ばしそうな奴だ。

「陸自、三等陸曹の岡村 小百合やでーよろしくなあ」
おかむら さゆり

胸がでかくてすごく綺麗で俺の好み……こんなことを考える時じゃ

ない！

大人の女性っていうイメージが強すぎて他のことが考えられない。

「陸上自衛隊！一等陸士 矢嶋^{やしま} 麗^{れい}」

うおっ歩いてる時からずっと男だと思ってたぞ。ああ胸がなくてシ
ョートヘアーだからかな？

れい「ない」胸……父親が貧乳好きだったのかな？

そんなことを考えていると……

「失礼」

「いったあ！」

麗が歩み寄ってきていきなりつま先を踏み抜かれた。

俺は女子にはよっぽどのがない限りでは出さない主義だ。
だから耐えたがこいつが男子なら迷わずてを出しているだろう。

つかこいつも心を読むのか……気をつけないとなあ……

いろいろあつてわすれていたが俺の自己紹介がまだなことを思
い出して自己紹介を始めた。

「俺は東出 将 気軽に将って読んでくれ」

中学一年生の自己紹介のようだったがまあいいだろう。

すると後ろの扉が金属の擦れる音を立てながら開いて入ってきたのは川井さんだった。

4人がビシッと敬礼している中小百合さんは「よお」と今にもいいそうな感じに手を上げた。

俺は「川井さんねてなかったっけ？」と疑問を抱いた。

川井さんの第一声は……

「もうちいとましと自己紹介しろ……」

だった。

第二十射（後書き）

微妙なところで終わってすいませんm（　　）m

感想・評価・お気に入り登録お待ちしております。

第二十一射（前書き）

連続更新途絶えたぜ~~~~

痛い！石を投げないで！

すいませんm（| |）m
勝手な一人芝居でした。

では第二十一射どうぞ

第二十一射

「川井さん！こいつの階級なんですか？」

小百合が疑問をぶつけた。

まあ自衛隊出身者がこういう部隊にはいるのだから階級を言わないのは確かに不自然だな。

「うーん……陸将でいいんじゃないか？」

「「「「「「「「「「は？」「」「」「」」」」」」」」」」」」

上司にこの言葉遣いはどうかと思われるかもしれないが、この人はそれ程のことを言ったのだ。

陸将とは諸外国の中将／＼大将に当てはまる階級だ。

なぜ幅があるかというと陸将は昇進しても呼び名は変わらず階級章だけが変わるという世界中に例のないものだ。

一説によると昔の幕僚長が礼砲の数が中将扱いだったためキレてこなくなったとか……

そんなことを考えていると川井さんが訂正の言葉を発した。

「冗談だ……やっぱり三等陸士からになるんじゃないか？」

冗談だと言った時点で5人がホツとし、俺だけは本当に冗談なのか？と疑いを抱いていたがまともな階級が出てきたためやっと安

心することができた。

「そつえばあっち行く前の階級じゃダメなんですか？」

あつちとはSFSのことで階級は三等陸士より二つ上の一等陸士だ。若いせいで階級をあげるのをためらわれてしまったからだ。

「ダメだ！お前は一回軍属を離れてしつかり卒業せずに帰ってきたことになるんだぞ？そんな奴に前の階級渡すか！」

といい「あつかんべー」としてきた。

いい加減子供扱いするのはやめて欲しいが口答えすると川井さんに睨まれるか、怒鳴られて新しく出会った仲間たちに上司に頭が上がらない奴っていうレッテルを貼られてしまう、と思い直しスルーした。

「はつきり実力もわかってないようなやつがいきなり自分より階級上だったら不信感だらけで空中分解しちまうだろうが」

川井さんの言っていることは一理あるが実力ならこういう部隊に誘われている時点でかなりの実力ということはわかっているのだから……

ゴチン

くっそおここで殴られたら上司に頭が上がらない子というイメージが……

こうなったらもういいか……

予想だが小百合さんは以外は逆らえないと思うし、だいたいの人が
上司相手ならこんな感じになってしまう!……と思う。

「兎に角お互いの実力を知らなければ信用のくそもない……だから
第三訓練場いくぞ!」

「了解!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3768z/>

Special Force School (特殊部隊学校)

2012年1月13日17時48分発行